

Journal of Chubu University Education

No. 20
2020

【教育スケッチ】

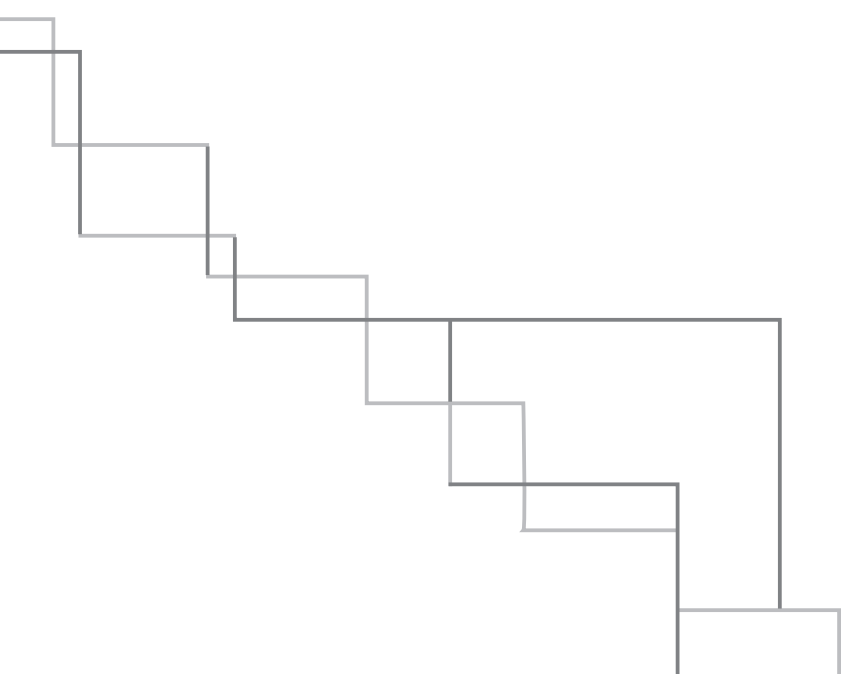
《海外便り》

英国リーズでの滞在を振り返って 加藤由崇

【Educational Essays】

Reflections on My Life in Leeds

..... KATO Yoshitaka



英国リーズでの滞在を振り返って

加藤 由崇^{*1}

1 はじめに

2019年4月から1年間、本学の海外研究員として、英国リーズ大学教育学部で研究を行う大変貴重な機会をいただいた。本稿ではリーズでの充実した研究活動に加えて、欧州連合（EU）離脱や新型コロナウイルスへの対応に揺れた英国での1年間の生活について報告させていただく。

2 リーズ

リーズ（Leeds）は、イングランド北部にある人口約80万人の都市である（図1）。イングランドではバーミンガムに続く規模の都市でありながら、郊外にはヨークシャーの広大な田園風景が広がる英国らしい街である。ロンドンまで電車で2時間30分、エディンバラまで3時間の距離に位置しており、交通の便も良い。マンチェスター国際空港にも近く、観光地としても有名なヨークには電車で30分程度で行くことができる。



図1 英国におけるリーズの位置
© OpenStreetMap contributors

市内にあるリーズ大学は、秋篠宮ご夫妻の次女である佳子さまが2017年9月から1年間の交換留学をされたことでも有名である。世界各地から学生が集う大学であり、滞在中には日本出身の大学院生や交換留学生

らと顔を合わせる機会もあった。キャンパス内には4つの図書館があり、蔵書数は合計280万冊に及ぶ。これは英国国内でも最大級の規模の蔵書数である。教育学部の目の前にあるLaidlaw Libraryでは、学生が夜遅くまで課題や研究に取り組む姿が印象的だった。

私は教育学部（写真1）の客員研究員（Visiting Academic）として、外国語教育の実践者研究の分野で著名なJudith Hanks博士と共同研究を行う機会を得た。研究テーマは「『探究的实践』に基づく英語授業の研究」であった。



写真1 リーズ大学教育学部

3 研究

私の研究分野は外国語教育、特に英語教育における授業研究である。博士論文の執筆後、英国やブラジルを中心として発展を遂げた「探究的实践」（Exploratory Practice）について、この取り組みを牽引した研究者らの生の声を聴きたいという思いが年々膨らんでいた。そのような折に、本学の海外研究員の制度を利用し、当該分野を代表する研究者であるHanks博士と共同研究を行う大変貴重な機会を得た。

3.1 探究的实践

探究的实践は、学習者と教師がともに実践・研究を創造する、当該分野では独特な授業研究だと言える。学習者あるいは教師が自身の「パズル」（puzzles）を探究することで、実践の理解を深めることを目指す。

*1 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム（英語）講師

例えば、ある学習者が「なぜ、私は英語を学んでいるのか」というパズルを設定したとする。学習者は文献調査や質問紙調査、インタビューなどを通して、自身が設定したパズルに関する自分なりの理解を深めたのち、探究過程を他の学習者や教師などに発表・共有することで、その理解をさらに深めていく。現代社会では、私たちはしばしば「問題」を設定し、その「解決」を目指すように意識的・無意識的に方向付けられていることが多い。しかしこの探究的实践では、一過性の問題解決にとどまることなく、パズルを設定した本人（学習者あるいは教師）の知的好奇心に基づく長期的な探究を通して、自身の言語観や指導観の理解を深め、ひいては教室生活の質（Quality of Classroom Life）の向上を目指す点に特徴がある。学習者や教師は普段目の前の実践（学習や指導）に追われ、意外なほどに自身の素朴な疑問を探究する機会が与えられていない。一度あえて一步「引いてみる」（step back）ことで自身の学習や指導の意味を問い直すことに探究的实践の意義があると言える。

このまま熱く研究の話を続けると、どれだけ原稿があっても足りない。ただ一つ言えることは、ここに記した私の探究的实践の理解は、英国滞在前にはなかったものであるということだ。Hanks博士との定期的なミーティング、探究的实践を生み出したDick Allwright博士との4時間に及ぶ対話（写真2）、そして当該分野を代表する研究者であるSlimani-Rolls博士やMiller博士らとの英国での出逢いがなければ、生涯をかけて探究したいと考えている「探究的实践」への強い思いを抱くことはなかっただろう。その意味で、この時期に私を快く送り出してくださった関係者のみなさまには頭が上がらない。

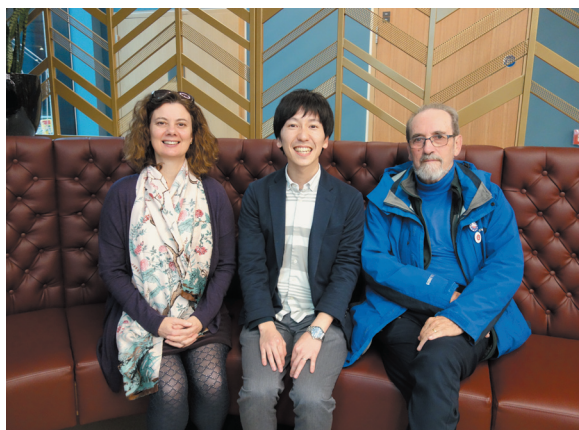


写真2 Judith Hanks博士（左）と
Dick Allwright博士（右）とともに

3.2 大学での様々な経験

集中的に研究を進めるかたわら、Hanks博士の

厚意により、滞在期間中には様々な経験を重ねた。大学院生向けに教授陣が各自の専門について話すリレー講義（私も3月にゲスト講義を担当した）、大学3年生（foundation courseがあるため日本でいう4年生）向けの卒業研究の授業、教育実習を控えた学部生向けの英語指導法に関する授業に参加するなど、教師や学生の振る舞いを実際に観察しながら英国の大学教育を体験できたことは今後の大きな糧となった。他にも、国内外から著名な講師陣を招いた各種セミナーに10件以上参加した（写真3）。また、英国を拠点に世界で活躍する教育学部の研究者らとミーティングを行い、談笑したことも非常に良い刺激となった。12月には、教育学部が主催する行事において、クラリネット奏者として教職員バンドの楽器演奏に加わる機会も得た。

滞在中には、Hanks博士とともに、実践者研究に関するウェブサイトの構築を進めた（図2）。さらに探究的实践に関心を抱く世界の30余名の研究者が参加するメーリングリストを作成し、SNSを用いて関連情報を発信するなど、研究ネットワークの構築を進めた。滞在中に築いた人脈は、今後の研究を進めるうえで大いに役立つと確信している。

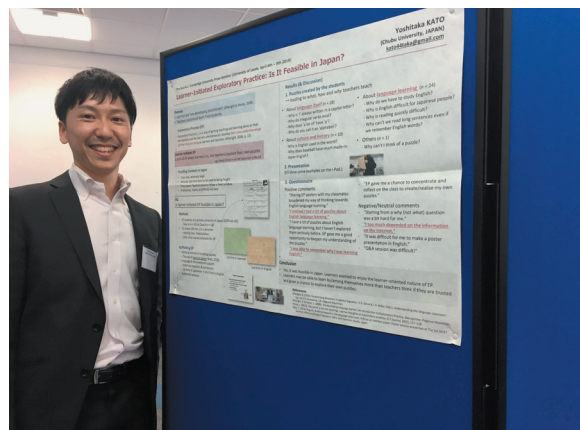


写真3 実践者研究に関するセミナーでの
研究発表（リーズ大学にて）



図2 滞在中に開発したウェブサイト
(<https://www.fullyinclusivepr.com/>)

先に述べたように、研修最終月の3月には、英語教授法について学ぶ大学院生を対象とした授業（TESOL Forum）において90分間の講演を行った。また、同内容を収録したオンライン教材を作成し、新型コロナウイルスの状況下で授業に参加できない学生に講演を配信した。これらの経験は、今後本学の学生の指導を行ううえでも非常に有益なものである。

4 リーズでの暮らし

ここまでは研究内容を中心としてリーズでの滞在を振り返ってきたが、本稿をお読みいただいている方のなかには、むしろ私の英国での「失敗談」にこそ興味がある方もいらっしゃるかもしれない。ご笑覧いただければ幸いである。

4.1 引越し関連のトラブル

英国での最初の住居は、大学構内の教職員専用のフラット（アパート）だった。今思えば、リビングの床が傾いていること以外は、研究に専念できる良い環境だった。このフラットに滞在できる期間は最長3ヶ月で、7月には引越しをしなければならなかった。現地の検索サイトを使って条件に合うフラットを探したが、この引越しの過程で多くのトラブルを経験した。最初に見つけた不動産会社では、実際の部屋を見ていないにもかかわらず3月まで8ヶ月分の滞在費の全額前払いを要求され（母国から支援を受けている研究者や留学生にはよくある話らしい）、周囲の先生の勧めもあってこの不動産会社との契約は諦めた。この判断は正解だったのだが、その後の家探しには非常に苦労した。新しく見つけたフラットは、部屋や家具も新しく、立地も良い部屋だった。しかし不動産会社の対応が悪かったのは最初だけで、その後の対応には辟易した。最も驚いたのは、引越し当日になっても何の連絡もなく、とりえず鍵を受け取りに不動産会社に直接出向くと、つい先日まであったはずの会社がそこにはなかったことだった（写真4）。最初何が起こったのかわからず、本当に夜逃げでもされたのかと思ったが、電話をすると「移転した」とのこと。何の事前連絡もなしに。思えばこれがすべての始まりだった。引越し後の夏は、絶えず住居関係のトラブルと葛藤し続けることになった。窓からの水漏れで汚れるソファ、きまって毎週金曜の夜に悩まされる騒音、最終的に2ヶ月以上かかった郵便受けの鍵の受け取り、LEDなのに切れる電球、少しずつ壊れているテレビやオーブン。しまいには不動産会社の担当者が離職して突然連絡が途絶える（問題のある担当者だったらしい）、など「海外に住むのはこんなに大変だったのだろうか…」と思うことばかりだった。11年前にも同じ英国のエディンバラに4ヶ月

間滞在したことがあったが、その時はホストファミリーとの生活だったため、当時の自分がいかに守られた生活を送っていたかを身にしみて感じるようになった。とはいえ、この引越し関連のトラブルのおかげで（?）、交渉のための英語力は間違いなく向上した。この引越しは決して忘れられない思い出になった。



写真4 「あったはず」の不動産会社

4.2 人脈を広げるうえでの悩み

海外生活で人間関係を築いていくのは容易なことではない。渡英直後は、大変ありがたいことにHanks博士の家族や友人らとの交流機会をいただいたが、それ以上に人脈を広げて海外で充実した生活を過ごすことは、短期間で実現できることではない。普段は学生に対して、「留学さえすれば友人や恋人ができ、英語も自然に話せるようになるなどまったくの嘘だ」（現地の人と交流する機会には自分自身で見つけなければならぬため）などと偉そうに語っているが、いざ自分がその立場に置かれると、自分自身の言葉の重みを痛感する。春先には悩むこともあったが、自分から歩を進めるしか選択肢はなかった。大学関係者が集う会に参加したり、大学の言語センターにlanguage exchange（英国人との言語交換）の可能性について尋ねたり、リーズ市内で開催されているESOL（英語以外の言語を母国語とする人たちのための無料英語講座）に積極的に参加するなど、人脈を広げるために地道に足掻き続けた。

最終的には、Hanks博士の家族や友人らと素晴らしい時間を過ごすことができたことに加えて、大学関連やlanguage exchange関連、ESOL関連、出産・育児関連など、学内外で様々な交流を深め、多くの友人や研究者仲間ができた（写真5、6）。リーズにほとんど知り合いのいなかった私がこれほど多くの方との出逢いに恵まれて充実した生活を築くことができたのは、本当に幸運であったし、またそれが自信にもなった。



写真5 Hanks博士の家族や友人らとの
クリスマスパーティーにて



写真6 教育学部主催行事における
教職員バンドでの楽器演奏

4.3 新型コロナウイルスの影響

「Happy birthdayを2回歌いながら手を洗うことこそ一番の対策だ」とBBCのニュースで流れる助言に従っていた日々が懐かしい。世界がこれほどまで深刻に、長くこのウイルスの影響を受けることになると

は、3月末の自分には想像ができなかった。1年間の在外研究は突如終わりを迎え、滞在最終週は（この1年を象徴するように）激動の1週間となった。帰国まであと1週間と迫った3月15日の朝、念のため予約していた23日発のルフトハンザ便の運行状況を確認すると、その便がキャンセルされたことを知る。すぐに22日の便に振り替えたものの、数時間後にその便もキャンセルに。そこで、ルフトハンザの名古屋着の別便を予約しながら（のちにキャンセル）、ANAの羽田着の直行便を独自に予約。この判断が功を奏し、なんとかロンドン経由で帰路につくことができた。（ちなみにこの時ヒースロー空港内のショップやレストランはほとんど開いておらず、閑散とした異様な雰囲気だった。）羽田到着後も検疫のために1時間以上待たされ、さらに欧州からの帰国者には日本政府から2週間の自主隔離の要請があったため、実家のある岐阜まで帰るのに公共交通機関を使用できなかった。結局、家族に車で迎えに来てもらって帰宅することになった。英国で生まれた生後3ヶ月の息子連れでの帰宅だったため、これは本当に助かった。出国直後に英国全土で外出禁止令が発表されるなか、「もし1日遅れていたら…」という思いもよぎった。今、こうして無事に生活できていることに心から感謝している。

思えばこの2019年度の1年間は、英国がEU離脱や新型コロナウイルスへの対応などに揺れた、まさに激動の1年だった。今なおその影響は深刻に続いているが、この状況のなかでも充実した研究生活を過ごすことができたのは、ひとえに関係者のみなさまのご配慮によるものである。心からお礼を申し上げたい。

5 おわりに

本稿では、英国リーズでの海外研究期間を振り返って研究と私生活での経験を短くまとめた。私を快く送り出してくださった語学教育プログラム（英語）の先生方、研究支援課と人間力創成総合教育センターのみなさま、その他関係者のみなさまに心からの感謝をお伝えしたい。今後は、この滞在で得た知見を存分に活かし、引き続き研究を進めるとともに、本学学生のための言語教育の推進に努める所存である。

Reflections on My Life in Leeds

KATO Yoshitaka^{*1}

*1 Senior Assistant Professor, Language Program (English), Global Education Center, Chubu University